

山口昌男先生と札幌大学文化学部

石塚 純 一

一九九七年四月、山口昌男先生は文化学部の初代学部長に就任し、新設学部の教育・研究そして文化活動の一步を踏み出した。一九九九年四月、札幌大学学長に就任したために直接的に文化学部に関わる機会は減じたが、学長職を辞したのちも特任教授として二〇〇五年三月に退職されるまで、八年間つねに文化学部のありようと活動に深い関心を持ち続けてこられ、また今日も変わらずその行方に注目されている。

山口先生の文化学部長および学長時代の事績については大学に諸記録が残され、また本書に掲載された山口昌男年譜にも記されているので、それらを参照されたい。ここでは山口先生が文化学部でやろうとしたことはどういうことだったのか、またそれをどのようにやろうとしたのかについて、私的な視点から振り返ってみたい。

一九九七年に始まる文化学部の最初の二年間は、新設学部を軌道に乗せるためにさまざまな試みを次々と提案し、教授会をはじめ学部の諸活動は山口色一色となった。一方で山口先生の提案（例えば研究室を再編し文化学部の教

員を六号館に集結させる等々)は、大学の規則や慣習、事なかれ主義と各所でぶつかり合った(それは他の大学であつても同様だったかもしれないが)。

山口先生が目指したのは、一言でいえば札大を「文化化」すること、大学を知の祝祭空間に変身させることだつた。これに尽きると思う。具体的にどんな風にそれを進めようとしたか、山口先生のユニークさが発揮されたいくつかの例を拾いながら、実現できなかったことも含めて記してみよう。

書物の復権

まず、山口先生は個人蔵書約四万冊を大学に受け入れさせる。図書館分類によらず「良き隣人」(ワールブルク図書館)方式によつて、連想ゲームのように本を配架した「山口文庫」を六号館地下に開設した。

続いて、郡司正勝文庫の設立。故郡司正勝先生(元早稲田大学文学部教授・演劇芸能史歌舞伎研究)は札幌すきのの出身で、札大に山口先生による文化学部が新設されるならばその蔵書を寄贈したいという意向を受けて設置された。郡司先生は九八年に亡くなったが、二〇〇四年には札大図書館の努力により長大な目録が完成した。その後、松本克平の収集資料を図書館に購入、郡司文庫と合わせてユニークな演劇関係資料を形成している。また故高橋康雄(元札幌大学文化学部教授・メディア・近代文学研究)先生の蔵書約六〇〇〇点がご遺族のご好意により六号館のチャットイングループに保管されることになった。その他、故藤田省三(元法政大学教授・政治思想史)先生の蔵書寄贈の話も進められたが、これは途中で頓挫した。山口先生は札幌大学図書館に既にある川島武宣文庫、松田道雄ロシア関係文庫などとも呼応させて、すぐれた研究者の個人蔵書を大学が持つことの有形無形の効果を考

えていた。

そして、札大図書館内に異例の文化学部図書コーナー（文化学部設立のための準備期間に収集した古書及び洋書類）を設置する。通常では図書館の方針どおり十進分類によって館全体にばらまかれ配架されるが、文化学を構想するために必要な書物群を目の前に出現させることで、学部学生の指針（後述の比較文化のコンセプトと連動する）としたいと考えられたのだろう。図書館がレファランスク群と専門書群と、ある宇宙像を描く書物のまとめり個人文庫という三つの空間をもつことによって、存在としての書物に遠近感を与えようとした。大学図書館の在り方に対しての問題提起であり、文化学部がリードすべき一つのテーマとして位置づけられた。

コンピュータで検索し本に行きあたるだけでなく、書物が蒐められ置かれる場・空間（図書館だけではない）の意味を考えさせ、身体的にそれを突き止めることの重要性、また書物との連続的な出会いから横断的に文化への視野が開けていく楽しさに気づく機会を学生たちに与えることを示している。

文化学部設立の理念にも通じる山口先生の学問についての思想は、著作の各所で語られているが、『本の神話学』第一章冒頭には次のような一節がある。

七、八年ほど前のことであるが、私はしきりに「思想史としての学問史」ということを考えていたことがある。だからといってとりたてて、学説史といわれていたものを改めてどうこうするというのではなく、それは、知識の存在形態（蒐集・保管・創造）の一つとしての学問に、特定の時代、地域の文化がいかに反映するかということを、学問の分野と既成の枠の中に押し込めないで、通分野的に、そして意識の他のあり方——すなわ

ち演劇、絵画、文学といった「他の」諸々の創造に携わる行為とのかかわり合いにおいて展望に収める方法はないであろうか、といった関心にもとづく模索のようなものであったといった方がよいであろう。このような視点を具体的に展開する方法を一つずつ確立することによって、人類学の「文化」研究はあまり無理せずに産業社会をも考察の対象とする手懸りを得ることができるかもしれないなどとかぬ妄想にふけていた。〔『本の神話学』中央公論社、一九七一年〕

人脈を生かす・大学を外に向かって開く

山口先生は、その多彩な人脈を生かして、いくつもの扉を用意された。それは大学を外へ向かって開くことであり、「街」を大学に呼びこむ窓でもあった。

毎週火曜日、札大構内で連続的に開かれた文化講演会《『北方文化フォーラム』(九七年四月)》。国内外でユニークな活動をしている学者をはじめ作家やアーティスト、役者やジャーナリストらを札幌に呼び寄せ、学生のみならず市民にも呼びかけて参加をうながし、マスコミへもPRを働きかけ、文化学部が札幌に誕生したことをアピールし、札幌大学が社会の中で果す明確な役割を意識し、地域文化をも変えていこうという空気を作り出そうとしていた。二〇〇一年以降は開催ペースを落とすが、北方文化フォーラムは現在まで引き継がれ、それまでの札大にはなかった文化学部の特色ある教育の一つとなった。

また講演終了後には教員、学生、市民を交えての懇親会が開かれた。学生は直接親しく著名な講師や市民と交流し、パーティ(宴)のもつ祝祭的時空間に自然と触れ、フォーラムや宴の仕掛けの重要性を体験的に学んだ。山口

先生が作り出した文化学部の空気はこういうところに顕著に表われた。

一九九七・九八年度には、山口先生担当の「文化学総論」の半分を北方文化フォーラムに当て、学生は毎回レポートを提出した。ちなみに、「文化学総論」の残りの半分にあたる講義テーマは、初年度Ⅱ「ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』を読む」、次年度Ⅱ「戦後日本のマンガ文化」であった。また、文化学部の研究紀要の名称を『比較文化論叢』と命名、文化学会（発足は故高橋康雄二代学部長の発案）の機関誌名を『危機と文化』とした。「文化は危機に直面する技術である」というU・エーコの言葉に喚起され、若者が必ず通過する危機に対し、日本でもかつて村落共同体が「若者組」などの文化装置を用意したように、文化の記憶と役割を意識した名づけだった。

九八年度には土曜講座も開かれた。多少の資料代を徴収して市民向けに毎週土曜日の午後「身体文化」「観光文化」「児童文化」「メディア文化」などのコースを並行して開催した。文化学部の教員以外にもアイヌ文化の専門家や道立文学館の講師が登壇した。これは故高橋康雄先生が運営に尽力した。

幻の札幌大学文化学部「劇場」構想も欠かすことができない。劇場は文化学部設立前に約束されていたが実現しなかった。イタリアの建築家が設計したプランとその模型が存在することから当初、劇場プランは現実性を持っていたことがわかる。それによるとコンセプトは「木の劇場」で、構造的にそれをガラスと鉄骨で包み込む形式である。舞台の背景は全面ガラスで仕切られ、その外部は野外円形劇場になる。観客席は洋楽対応の椅子式にもなるし、機軸形式にも変更可能である。階上には郡司正勝文庫（演劇芸能関係書）を設置し、演劇芸能関係のマネージメントやプロモートを学ぶ実験場（木戸敏郎元文化学部教授担当）としても位置づけられていた。劇場は音と映像とパフォーマンスの舞台だが、札幌大学の学生自身の表現の場でもあり、研究発表や講演の場、企画のトレーニング場、

市民との交流の場、札幌から世界へと発信する舞台と構想されていた。劇場はできなかつたが、現在にいたるまでに本館ロビーや学長室ギャラリー、六号館ロビーやシアター教室と呼ばれた6205室（現在はパソコン教室に）などで数多くのパフォーマンスや公演が行なわれてきた。文化学部には確実に「精神としての劇場」が育ってきている。

山口先生の学外での多くの活動も、大学の文化化と対応して見ることができると言える。郡司正勝先生作・演出の最後の公演となった『歩く』札幌公演や札幌「ちえりあ」柿落としとなった「山本狂言と出会う会」など演劇の上演に尽力。また主催者側の中心人物として参加することによって、常に札幌大学文化学部の活動を外へ向かってアピールしていた。また会長を務める日本記号学会第一九回全国大会「テーマⅡ文化における仮設性」の会場を引き受けたが、この大会も文化学部が追究するコンセプトと合致するものであった。

これら山口昌男先生の構想は、学部を教室に閉じ込めるのではなく外に向かって開いていくこと、市民や他大学の学生たちもここに引き寄せ、集まってくるような魅力的なイベントを開くこと、また文化学部の学生がどんどん外へ出て行って違う文化を呼吸することを積極的にすすめる内容をもっていた。

学部教育の基本方針

その一、両学科の壁を低くする。両学科が同じ問題を同じ場（教授会）で議論する原則。

その二、両学科共通の方針として「比較文化」を学びと研究の基本とすること。具体的には「比較文化のコンセプト」集を作成し提案した。学生は四年間かけてこれらのコンセプトと文献を参考にして自らのテーマを見つけ、

調べ学びながら卒業論文に結実させることを目標に呼びかけた。その概要は『危機と文化』一〜三号の巻末に掲げられた「テーマと参考文献」一覧に明らかである。テーマは山口先生が掲げ、参考文献は高橋康雄先生を中心に作成された。

その三、「比較文化のコンセプト」を敷衍していくと、テーマごとのゆるやかなまとまりが形づくられる。それを基にやがて両学部は六〜八のコース制へと変化して行くことが望ましいと考えられていた。教員が専門あるいは共同する意識によって集合し、少グループごとに共同して学生指導に当たるべきだと主張。これはその後、学部で検討している「ユニット」の考え方に通じるといえるかもしれない。

その四、教育と研究についての合宿討議（北湯沢温泉にて）と、『比較文化論叢』第一号の合評会。この二つの試みは山口先生の学長就任で、結局一度だけで終わったが教員各人がどのような領域をどのような視点で研究し、学部教育にどのような問題意識をもっているかを語り合い、かなりつつこんだ忌憚のない議論が行なわれた貴重な経験だった。紀要合評会では山口先生が一篇ずつの論文にコメントした。大学内のこうした試みは、今思えば山口昌男という図抜けた個性・知性の存在によって可能になったといえよう。

大学院文化学研究科付属ペリフェリア文化研究所の構想も山口先生の「中心と周縁」論に基づくものである。命名者は今福龍太（元文化学部教授）先生であり、サハリン、北海道、沖縄、香港、パプア・ニューギニア……列島弧を延長して連なる壮大な周縁文化研究と海外における日本文化研究の推進のための構想と方法がしばしば語られた。

山口先生が学部運営上強調したかったことは、上記のさまざまな提言、活動からうかがわれるように、言葉・文

字による表現のみならず、音や映像や身体表現を重視すること、学生たちがパフォーマンス性を身につけること、大学の外に出て行なう活動・フィールドワークの奨励、パソコンを使って世界の情報を吸収すると同時に、教師も学生も一人一人が起点となって札幌から世界に発信できる力を育てようということだった。「一流大学はむりでも有名大学にはなれる」(木戸敏郎先生)という言葉に勇気づけられて、個性あふれる文化学部を起爆剤に大学全体を「文化化」し再編しようという意気込みだった。そのためのコミュニケーションを内外に積極的に求め土壌作りに努めた。

学長時代(一九九九年四月から〇三年三月)

学長就任以後は大学全体の仕事に精力が傾けられた。理事会および評議会関係に関わる山口先生の仕事や学長としての校務についてはコメントできないが、文化学部の構想に連動する点についてだけ、一言記しておきたい。

その一、学長室をギャラリー(展示スペース学長室)に改造。中央棟二階の理事室に通じるガラスドアと学長室のドアを取り去り、石膏ボードで窓とキャビネットと壁面を覆い、照明具をとりつけてまっ白な広いオープンスペースを作り出した。その変更は物議をかもしたが、堂々と自分の考える大学のイメージ作りにまい進した。このギャラリーでは山口昌男とその友人たちというコンセプトで全十三回の展覧会が開かれた。このスペースは学生、教職員はもちろん市民にも開放された。

その二、国際文化フォーラム(時計台フォーラム)を月に一度(水曜日)開催。趣旨は札幌大学が街に出て行き、市民に向けた講演会を通じて札大をアピールする。当初は原則として札大の教員が国際的な話題について講演する

方針だった。その後外からの講演者をも交えて開くことになった。外部の講師には、山本東次郎(狂言)、京極夏彦(作家)、大隅和雄(日本史)、四谷シモン(俳優・人形師)らがいた。山口先生は札幌時計台の二階が自由に使えると聞いたとたん、ただちにアイデアを出しこれを実行に移した。日常的な出来事や情報を学問的な関心にパツと結びつけて、イベントに仕上げってしまう能力は山口先生の面目躍如たるものである。

学部長時代も、学長になつてからも、振り返るといずれの試みも仕掛けも、ずっと一貫した方向性を持っていた。実現されたことも、されなかつたこともあるが、一つ一つのアイデアがいまも示唆に富み、新しい試みをせよとけしかけてくるようだ。

最後に、二〇世紀後半の日本の知的風土に山口昌男が登場し(一九七〇年ころ)、私たちはその現象によって挑発されつづけてきたが、その山口昌男という知の全体性にとって札幌大学の八年間はどのような意味があつたかという大きなテーマがある。しかし、それは今の私には手に余る仕事である。

そのかわりに、この八年の間に『山口昌男著作集』全五巻(筑摩書房)の刊行がはじまり完結した(二〇〇三年三月)ことを記して終わりたい。著作集の編集は今福龍太(元文化学部教授)先生によってなされた。この著作集は世の一般の個人著作集に比して一風変わっている。編集方針について今福先生は談話でこう述べている。

「(山口昌男著作集を考える場合)それを顕彰したり解釈したりする権威者・専門家がないということにおいて、まず山口さんの仕事はあるユニークネスをもっている」受け止める人間に、非常に強い動機づけとして、あるいは挑発として与えられるけれども、それを誰かがさらにオーソリテイを深めていくというものではなかつた。山口さ

ん本人がそういう仕事をされてこなかった」と述べ、網羅的な著作集とはせずに、「知」「始原」「道化」「アフリカ」「周縁」と名づけて各巻を構成している。その五つの塊は山口先生の五冊のモノグラフ的単行本（『本の神話学』『歴史・祝祭・神話』『道化の民俗学』『アフリカの神話的世界』『文化と両義性』）との対応関係を示している。

いま改めてこの著作集を眺めながら、さらに『挫折の昭和史』『敗者の精神史』『内田魯庵山脈』という九〇年代半ばから二〇〇〇年以降の大著を並べ、もう一方に文化学部の新設に関わった山口先生を置いてみる。袋小路に入った人文社会科学からいかに脱出するか、既成の大学と教員の枠からいかに自由になるか、二十一世紀の大学像を探るべくさまざまなかたちで展開された試みは、いまでも続く札幌大学文化学部の存在理由である。

長い間制度に絡めとられてきた大学という楼阁に立ち向かうドン・キホーテ、そこには固定された業績や顕彰とは無縁の、若々しい精神が宿っているのである。